マラヤ･グアチャ遺跡新石器時代の土器

川名　広文

1．はじめに

グアチャ遺跡は20世紀半ば頃に調査・報告された、東南アジア考古学にあって中石器～新石器時代にわたる埋葬群を伴う有数の岩陰遺跡としてよく知られている。そこの葬墓制については、以前に分析・検討を加えたことがある［川名 1986・1987］。本稿では副葬品や埋納址等で出土した新石器時代の土器について、研究史を踏まえ若干の検討と考察を行いたい。

この遺跡は半島マレーシア（旧称マラヤ）の北東部を占めるケランタン州に所在し、州都コタバルで南シナ海に注ぎこむケランタン川の支流であるネンギリ川中流左岸の石灰岩地塊に開口した壮大な岩陰に占地している（図１）。

20世紀にあって英国統治時代に３度、独立後に１度の考古学的調査が実施されてきている。まず、1935年H.D.ヌーンによって２か所にトレンチが入れられた（図２：N-1、N-2）。この10日間ほどをかけた試掘調査で新石器時代の埋葬３基を確認し、これらに伴う完形土器８個体（うち縄目押捺が６点を占める）とほかに多数の土器片の出土をみている。岩陰や層序の略図それに遺物の写真図版を付して成果の概要が報告されている［Noone 1939］。

次いで戦後の1951年に短期日ながら、ウィリアムズ・ハントが本格調査を翌年に期して踏査した。この予備調査で、新石器時代に属すとみられる赤色磨研や縄目、山形文様の土器片が採取されている［Williams-Hunt 1952：183］。

そのW.ハントの遺志を受けて、1954年にG.シーヴィキング夫妻主導のもと、長さ約110m、高さ18m余の規模を有する岩陰のほぼ中央周辺

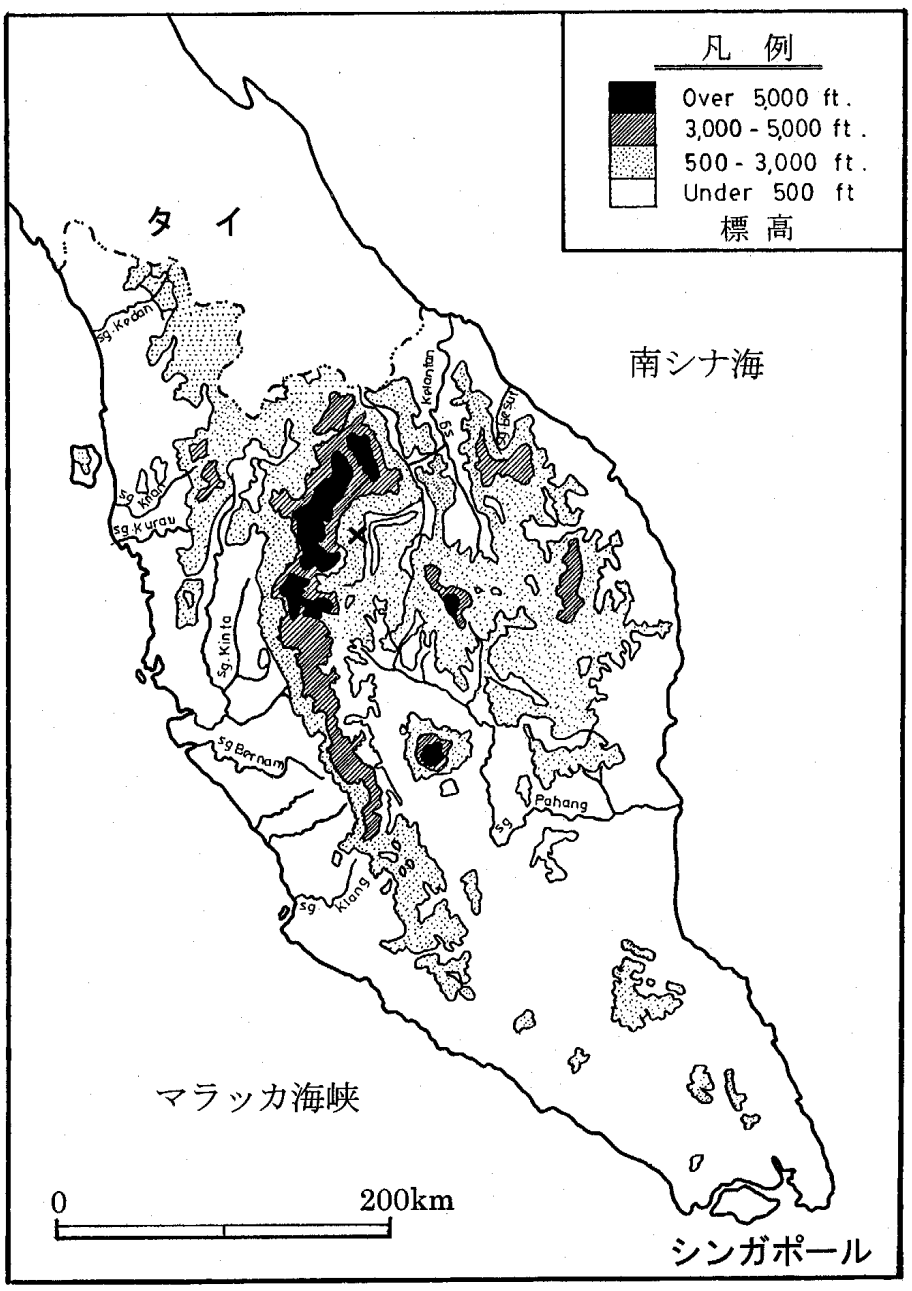


図１　半島マレーシアの地形図とグアチャ遺跡の位置（×印）

に４つの調査区（図２：①～④）を設けて、1ヶ月余を費やし本格的な発掘が実施された［Sieveking 1956］。新石器時代の埋葬は伸展葬と二次葬が認められ、①区で９基、②区で４基、③区で９基が確認され、先の試掘調査での３基と合わせると都合25基を数える。その大半に土器が普遍的な品目として副葬されていた。

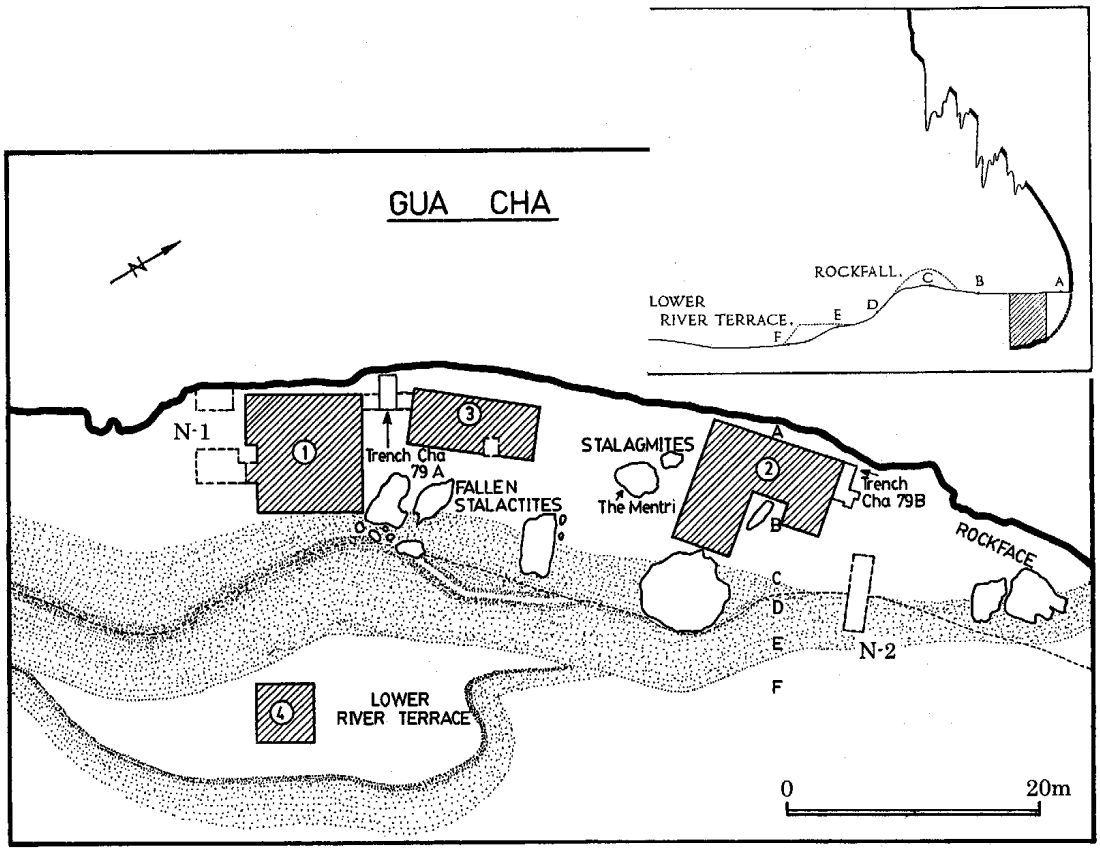


図２　グアチャ岩陰遺跡の調査区
（N-1,N-2：1935年Noone試掘坑、①～④：1954年Sieveking調査区、Trench Cha 79A・79B：1979年Adi再調査区）

1979年、アディ・タハはP.ベルウッドと協同し隣接する小範囲で再発掘を行ない、新たな成果をもたらした［Adi Taha 1985］。すなわち、トレンチ79Bにおいて新石器時代の開始期に相当する層の炭化物から3020±230B.P.、さらに1954年調査③区の炉址でみつかった炭化米から810±80B.P.というC－14年代がそれぞれ得られている［同:35］。これにより、グアチャ遺跡新石器時代の上限と下限について、おおよその年代仮定が可能になった。

２．言及略史

まず以下に、G.シーヴィキングによる調査報告の以後にものされた、本稿に関連する先学の指摘について概述しておきたい。

B.ピーコック“マラヤ先史時代の土器概観”で、グアチャ遺跡を含めて標記の土器について初めてまとまった分類と検討がなされた［Peacock 1959］。論点が多岐にわたるので、本論に入って詳しく言及することとしたい。

日本でもつとに『世界考古学大系』のなかで、「さいきんマラヤ連邦では、半島東海岸ケランタン州のグア・チャGua Cha貝塚を、ツウィーディらが発掘調査しているが、この貝塚にはいくつかの層序があるらしく、各種の土器が多数出土している。この地方の土器文化の編年もようやく可能になるような重要遺跡のようにおもわれる」と紹介されている［江坂 1961：75頁］。その典拠は「参考文献」にも挙げられているように、発掘調査報告書の刊行直前に出版された“先史時代のマラヤ”［Tweedie 1955］とみられる。

その後現地では、アル・ラシドがクアラルンプール国立博物館に所蔵されていた1954年発掘の出土土器片を分析している［Al-Rashid 1969］。

この頃日本では、普及書「沈黙の世界史」シリーズの『半島と大洋の遺跡』で１頁弱にわたって当遺跡土器について概説されている［小林 1970:176頁］。胎土、色調、スリップ、黒色磨研、縄目、形態の多様性、器形（碗、鉢、環状脚台付きの浅鉢、華麗な文様をもつ広口壺、二段八個の懸垂用の孔をもつ鉢、円筒形器台）、施文具などにふれた。なお、先のTweedie［1955］やPeacock［1959］の所論を踏まえている。

P.ベルウッドによる大著“太平洋への人類の進出—東南アジアとオセアニアの先史学”［Bellwood 1978：168、邦訳『太平洋』214頁］では、報告された土器の代表的な器種（９種10点）を図示し、グアチャの新石器文化後期はバンカオ文化（Ban Kao様式）に属すると説く。また、遅輪で製作され、縄目文が支配的だが、稀に曲線の刺突文もあって、それらはタイのノンノクタ（Non Nok Tha）遺跡の早期やインドシナの新石器時代の土器とも類似している点を初めて指摘した[*1]。また、三足土器を欠いている点もセーレンセンの設定したバンカオ後期の土器に等しい、とした。加えて、断面T字形を呈する石製腕輪の形態から、香港や北ベトナムにおける紀元前２千年紀および１千年紀の脈絡に併行するとみる交

差年代観を初めて示した。

『世界考古学事典』では、「この新石器文化はさらに新旧２時期に区分されるという。遺物は副葬された土器、石器、装身具で、土器は皿、鉢、台付鉢、広口壺など形態の変化に富み、文様として櫛状施文具を用いた渦巻文、縄蓆文、方格文がある」と要説されている［今村 1979:304頁］。

また『世界陶磁全集 南海』では、グアチャ遺跡で出土したビーカー形櫛歯文土器の図を対置させ、「土器の器形はバン・カオ『前期』とも『後期』とも異なっているが、有文土器の施文方法は同じである。少数であるが、格子の叩き目も出現している」とし、さらに石製腕輪の製作技術やビークト・アッズの存在を加味し、放射性炭素測定値の下限で紀元前1300年前とされる「バン・カオ『後期』よりも遅れるものとみてよいだろう。ここでも青銅器の伴出はみられないが、ベトナムの青銅器時代の石製腕輪の形との近似をみると、東南アジア北部で青銅器が使われはじめた時代に近いことは、十分考えられる」とおおよそながら相対年代が示唆された［今村1984:263頁］。また、「土器の関係でみるならば、バン・カオ、グアチャ、ノンノクタ最下層、バン・チェン最下層の土器が、年代差はあるけれど、施文方法と黒色磨研の傾向を有する点で共通し、一つのグループにまとめることができるのである。さらにベトナムのフングェン文化の土器がこれと近い関係にある」と、より詳しくインドシナ半島の主要遺跡との近縁関係が説かれた［同前：266頁］。

再びP.ベルウッドによる“インド＝マレーシア群島の先史学”［Bellwood 1985：261-65］では、前著“太平洋”で触れていない先のB.ピーコック［1959］の異説（グアチャの新石器時代を前期／後期に二区分する報告書所見への疑義）を紹介するほか、クアラルンプール国立博物館のAdi Tahaによる再調査で新たに得られた放射性炭素測定年代を重用する。すなわち、グアチャ遺跡の新石器時代の埋葬群は紀元前1250年から紀元後1000年までのある単時期に設けられた、と説く。

近年刊行の概説書「世界の考古学」シリーズの１つ『東南アジアの考古学』では標品の図を交え半頁余をあてている。すなわち、チャ洞窟の「土器は縄目土器がほとんどで、さまざまな器形がある。浅鉢や平底の土器、

高坏、圏足付の土器などのほか、注意されるものに背の高い口縁部が大きく外側へ湾曲したチューリップ形で、文様は刺突文を沈線で区画した帯状文によって斜線文や渦巻文を描いた土器がある。この種の文様はベトナムのフングェン文化やホアロク文化の土器、またタイのコックパノムディ遺跡の土器などとも共通するところのある文様である」と、より具体的な類縁関係にも言及した［新田 1998：71頁］。

３．土器の考察

（１）概　観

1954年の本調査では少なくとも百個体ほどの完形・復元土器が発掘されている。そのほとんどは埋葬に共伴した、もしくは“埋納”された状態で出土した。報告書にはそのうち副葬土器66個体余の大概52点の実測図が収載されている。

他方、一部石器を含む土器の埋納址は調査①区で11箇所、②区で５箇所、③区で１箇所見出されている（p.129-30）。うち土器の個体数は上記の順に、18点余、８点、２点で都合28点余となる。これら遺物の図は後編で掲載予定とあるが、未刊。

遡ってH.ヌーンによる試掘調査においても、伸展葬３基（A＝トレンチN-1、B,C＝トレンチN-2で検出：図２）に副葬された完形土器計９点余について写真図版や報文で窺うことができる［Noone 1939］。ちなみに“先史時代のマラヤ”［Tweedie 1970：Fig.12］に載るグアチャ遺跡の鉢形土器（図８-3）は、この伸展葬Cに伴った副葬品［Noone 1939：PL.№7］と目される。

（２）器種と類型

B.ピーコックがグアチャ遺跡出土土器について、都合12（原著ｉ～xii）の器種に大別しさらに細別を加えた分類を提示しているので、まずおさえておきたい［Peacock 1959：125-35］。

１種　脚台付容器（図３：ａ～ｎ）

1-1類　高坏（ａ～ｃ）

ａ,ｂ：無文でスリップ、赤塗りを施す。

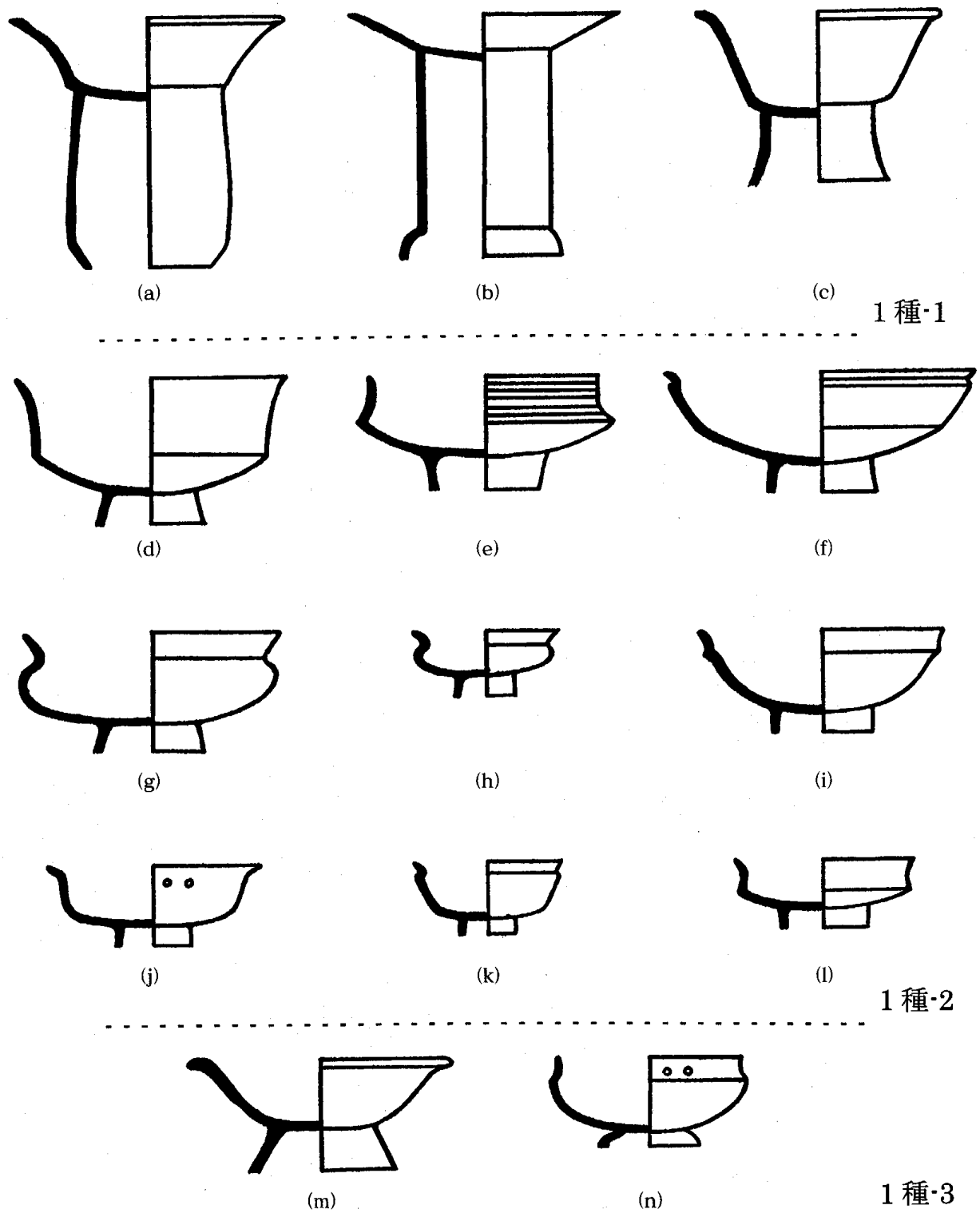


図3　グアチャ遺跡出土土器の分類（1種　1/8）

c：口縁部と台部に磨き、体部に縄目を施す。
赤褐色

1-2類　環状台付浅鉢（d～l）

明赤褐色。体部下半と台部に縄目、口縁部に磨きを施す。

e：口縁部と肩部に平行沈線を施す。

j：口縁部に小孔

1-3類　円錐形／半球状台付浅鉢（m～n）

明赤褐色。体部下半と台部に縄目、口縁部に磨きを施す。

n：口縁部に小孔

２種　突起（稜）付浅鉢（図４：a～i）

明赤褐色からほとんど黒色まで。

突起部まで縄目を、口縁部に磨きを施す。

b,i：口縁部に小孔

３種　双円錐形壺（図４：j～k）

赤斑を有し、暗褐色あるいは黒色。

体部下半に縄目、上半に磨きを施す。

４種　球形壺／広口壺（図４：l～m）

l：明褐色。体部に縄目の叩き文様を不規則に施す。

m：暗赤褐色。体部下端は縄目で、上半は平滑にする。

５種　碗・坏（図５：a～n）

淡黄色から暗赤褐色まで。

j,l,m：口縁部を除く体部に縄目を施す。

a,b：内面に沈線文を施す特異な例。

６種　丸底深鉢（図６：a～c）

淡赤褐色。体部に縄目を施す。

７種　バケツ形容器（図６：d～i）

e：淡赤褐色。体部に縄目を施す

d,f,g,h,i：黒斑を有し、褐色あるいは黒色。

d：稜まで縄目を施す。

f：口縁部に列孔を２列。器面に縄目はなく、磨きを施す。

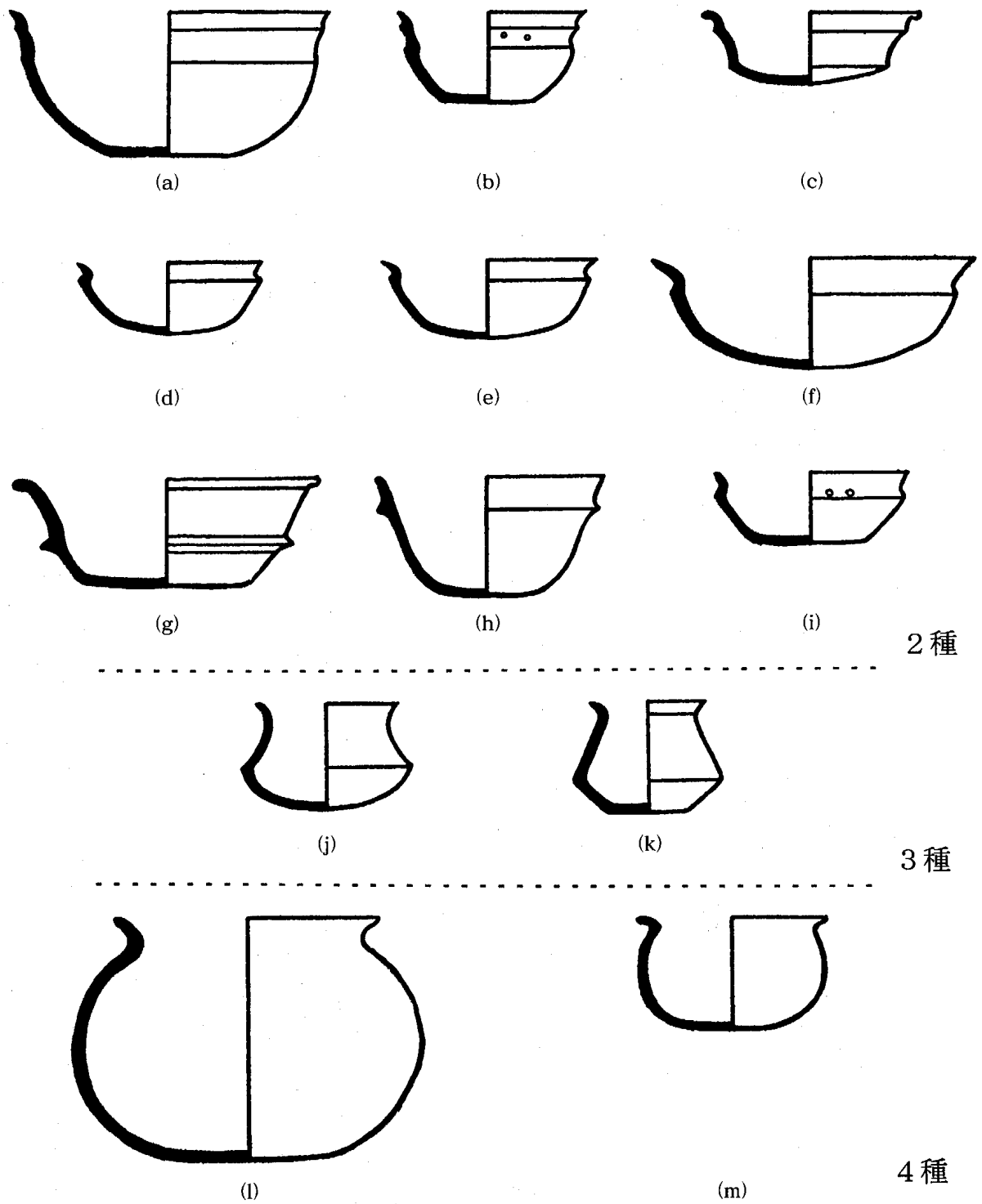


図4　グアチャ遺跡出土土器の分類（2～4種　1/8）

g,h,i：底面のみに縄目を施す。

8種　ビーカー形容器（図7：a～c）

a：暗赤褐色。器面は平滑。区画沈線内を櫛歯で刺突し渦巻や綾杉状模様の装飾を施す。(図8-1参照)

b：暗赤褐色。胴部に縄目、口縁部と頸部に磨きを施す。

c：暗赤褐色。器面は平滑。区画沈線内を櫛歯で刺突し帯模様や山形状に装飾する。[Peacock 1959：PL.1-b] に相当。

9種　器台（図7：d～f）

9-1類　環状器台（d）

黒色磨研土器。穿孔を有す上例もある。

9-2類　括れた器台（e）

暗褐色。平滑な器面。

9-3類　円筒形器台（f）

暗赤褐色で平滑。

10種　有孔コップ形容器（図7：g～i）

赤斑を有し、暗赤褐色から黒色まで。無文で磨きを施す。

11種　壺（図7：j～l）

赤褐色。k：口縁部に一孔があり、底面に縄目を施す。

12種　種々雑多（図7：m～o）

m：暗褐色。口縁部に磨きを施す。胴部はジグザグ模様の櫛歯刺突文で装飾する。(図8-2参照[*2])

器形は7種（i）に近似する（私見)。

n：大鉢。暗褐色。底面に縄目を、のこる胴部に磨きを施す。口縁部に3～4条の平行凹線を施す。

o：蓋か？　明赤褐色。底面に縄目を、口縁部に磨きを施す。

以上から、器形を中心にすえ色調、縄目、磨き（磨研)、装飾文様、施文具、有孔などの諸属性を考慮して分類を試みていることが分かる。ただ、一部分類から洩れている標品も見受けられる。遺跡報告書(1956)では、副葬土器の大方について実測図の掲載があるものの、詳細な説明

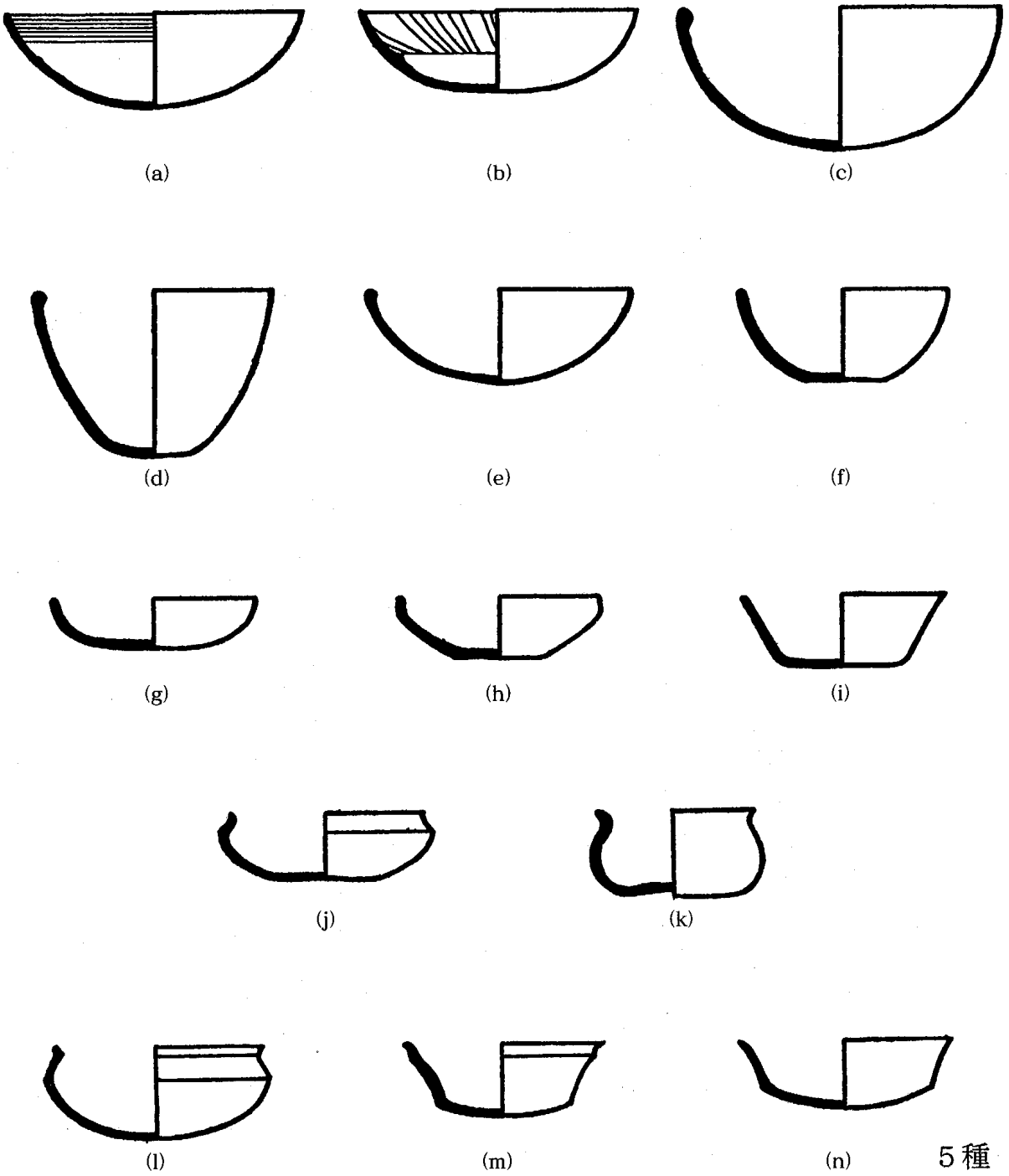


図５　グアチャ遺跡出土土器の分類（５種　1/8）

が省かれているので、埋納址等を含めた出土土器全体にわたる観察に基づいた如上の分類や所見は重要である。

（3）分　析

ここで、各埋葬の副葬土器の組成を上掲の分類を適用し検討してみたい（図9[*3]）。

まず、新石器時代の当遺跡埋葬群では、南西（川上）―北東（川下）を基軸にした直交三極的な頭位方向規制が看取され、うち北西にとる傍流派２例（№31、32）にあっては、総じて通有な副葬品といえる土器が一点も副えられていないという注目すべき相関事象が認められる。一方、最多の葬例は南西頭位をとり主流派に属す、若年女性の８号墓並びに25号墓で、土器は双方７個体が副えられ、なかでも８号墓は腕輪をはじめ副葬品目も豊富で比して厚葬と認められる（図10）。

さて一瞥して、かなり多様な器種が往時すでに製作使用されていたことが分かる。高坏（1種-1類）は副葬用には充てられていないことが浮かび、器種からして共同体の祭礼儀式に用いられた儀器と推測される。片や、最も多く副葬された器種は碗・坏（５種）で計10基16点が認められ、一般的な食卓用銘々器（一部大振りは共用器）とみなすことができよう。次いで、突起付浅鉢（２種）が８基11点、台付浅鉢（1種-2,3類）が７基11点と多く、おそらく食卓容器ないしは練鉢・こね鉢・擂鉢などの調理用土器にあたるだろう。このうち大振りの台付浅鉢は炉の中に立てて煮炊きに供された可能性もある。

調理用土器と推測される器種として、まず双円錐形壺（３種）は蒸し器の形状に適っている。また、丸底深鉢（６種）の作りは容量と熱効率に適い、米や雑穀それにスープ類などの煮炊土器とみることができる。これらは４基計５点を数え、なかでも多分調理を賄ったとみられる若年女性に同定されている８号墓に丸底深鉢（６種 c）が副葬されており、用途の状況証左と言えまいか。

バケツ形容器（７種）には幾分丸底・平底・揚げ底とがあるが、概して水入れ（水甕・水壺）や貯蔵用に使われたと考えられ、５基計６点を数える。とりわけ先述の８号墓出土の当該品（７種 f）は２段の列孔を

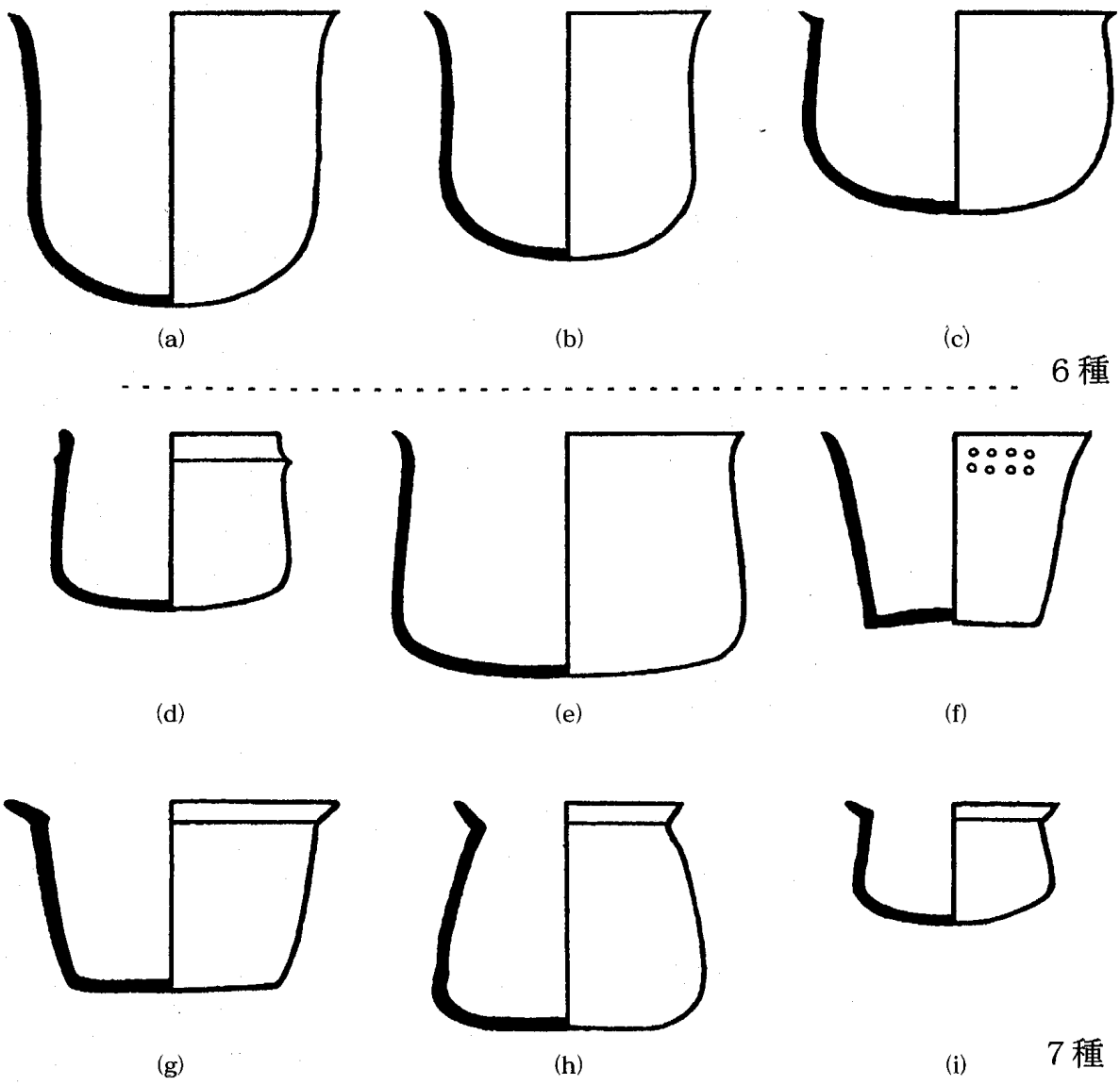


図6　グアチャ遺跡出土土器の分類（6～7種　1/8）

具える唯一の類で、紐孔に通し吊り下げた使用法を彷彿させる。また、頭位方向において亜流派（北東＝川下）に属す28号墓は磨製石斧３点と土器２個体が副葬されていたが、その土器は両方ともバケツ形容器が選ばれており、特異な観がある。関連して同じ亜流派を分かつ27号墓も磨製石斧や貝製スプーンなど優品を具え、かつ土器も５点と多い方に入るなか、稀少な円筒形器台（９種 f）がうち２個体を占める実相がある。ここでも頭位方向と副葬土器の組成にある種の相関が見て取れる。なお25号墓出土の揚げ底を呈する円筒形容器（図８-4）は分類中の類型から洩れているが、バケツ形容器（７種）と同様の用途が推測される。

広口壺（４種）や小型壺（11種）は貯蔵用土器とみられ、副葬品ではそれぞれ１例、３基計３例をみる。

ビーカー形容器のうち櫛歯刺突文で装飾された部類（８種 a,c）はハレの場に供された器であろう。副葬品としては、２基計２個体が出土。特に前者（図８-1）の系統･類縁関係について先学の関心を呼んできた。

器台（９種）は３つの類型が知られるが、うち副葬されていたのは環状器台（９種 d）が１基２点､円筒形器台（９種 f）が２基計３点である。

有孔コップ形容器（10種）は副葬品としては８号墓に１点出土している。さしずめ、紐孔を具えた飲料用器辺りであろう。

種々雑多（12種）の３例のうち、まず平行凹線を施す大鉢（12種 n、図８-3)がC号墓にあって２種や５種と入れ子になって発見されたので、共時性がある程度保証される。次いで､櫛歯刺突文が施された12種 m(図８-2）は８種と施文手法が類似するか観察を要する。最後に置かれた12種 oはかなり浅い作りなので蓋と目される。なお、蓋は副葬品では出土していない。

説かれている如く、これらは当時の生活面近くの埋納址から出土する器種と類似しているので、多分日常使用されていた土器がそのまま副葬されたのであろう［Sieveking 1956：101］。

（４）小　考

ところで、グアチャ遺跡の新石器時代について、報告所見では年代的に二分して捉えられている[*3]［同：107］。すなわち、前期は粗製で原初的

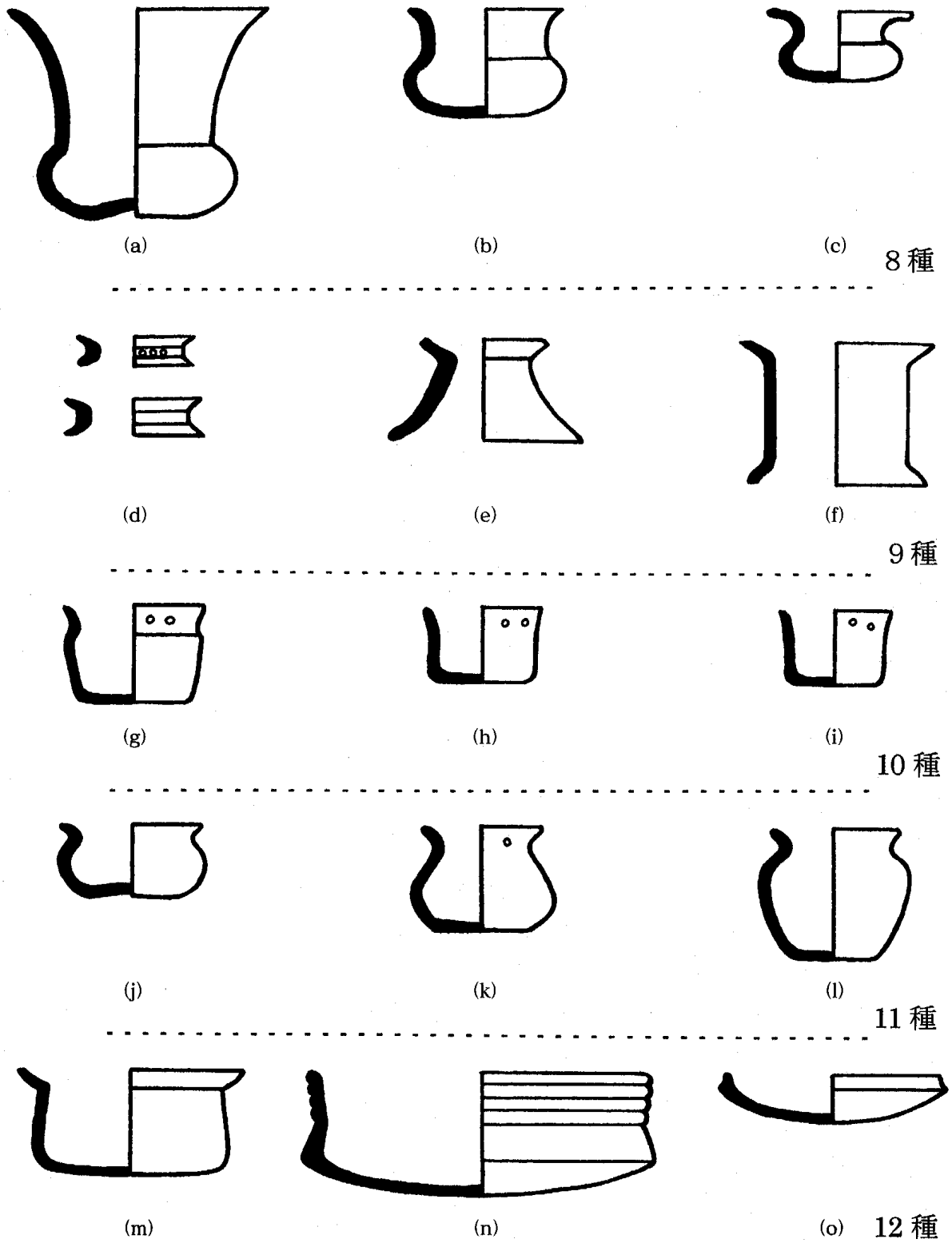


図7　グアチャ遺跡出土土器の分類（8～12種　1/8）

なデザインの縄目土器、方角石斧を伴っていない、断面凸レンズ状の大型磨製石斧（２号墓)、簡素な石製腕輪（１号墓左右）等の諸相に特徴づけられる。他方､後期は豊富な副葬品､多種なデザインにわたる土器、発展したデザインの石製腕輪（８・９号墓)、ビークト・アッズや樹皮叩き具、ブキット・テンクレンブ遺跡型の器台（９種 e）等の諸要素に代表される。

なかでも土器の差異についてふれて、前期（１・２号墓）のものは原初的で手製による粗い成形と認められ、一部は焼成も芳しくない。しかしながら後期のものは、高度に形式化された装飾法を具え、７～９号墓の例のように発展したデザインになり突起付浅鉢（２種）や台付浅鉢（１種）さらにほかの形式を含み、大半がのろい回転台の上で製作されている。また、赤色／黒色磨研の無文土器や器台も存在し、縄目土器は継続発展を成している［同：89]。

そして層位的所見から、両時期の占地にはおそらく100～200年ないしはこれを越える年代の隔たりがあるのではないかと推測されている[同:105]。

これに対し先のB.ピーコックは、前後期二区分に反論する。つまり、造墓に関わる層位的認識に再考を加えたうえで、時期が別とされる１・２号墓（前期）と25号墓（後期）に伴う11種土器が残りの品より簡素なデザインと技法で共通する点、両時期の葬墓に深さの差異が認められないとする発掘所見､縄目土器の新旧併存､赤色無文土器の編年的評価（４号墓５種 g／25号墓:図８-4、27号墓９種 f）などを踏まえ、はじめて疑義を提起した［Peacock 1959：126-27]。

ところで､“先史時代のマラヤ”の概説では、グアチャ遺跡土器の最も顕著な面は脚台付容器の存在であり、ビーカー形容器もかなり特異である、とされた。さらに、口縁部直下に一対ないし数個の小孔が向かい合うように施されている事などを特徴に挙げており、その用途を家屋の垂木に吊り下げるための紐孔と推考する［Tweedie 1970：17-18]。

さて、1979年にアディ・タハが再発掘した地点（図２：79A,79B）からは、新石器時代の埋葬は検出されなかったが、層位的な出土データが

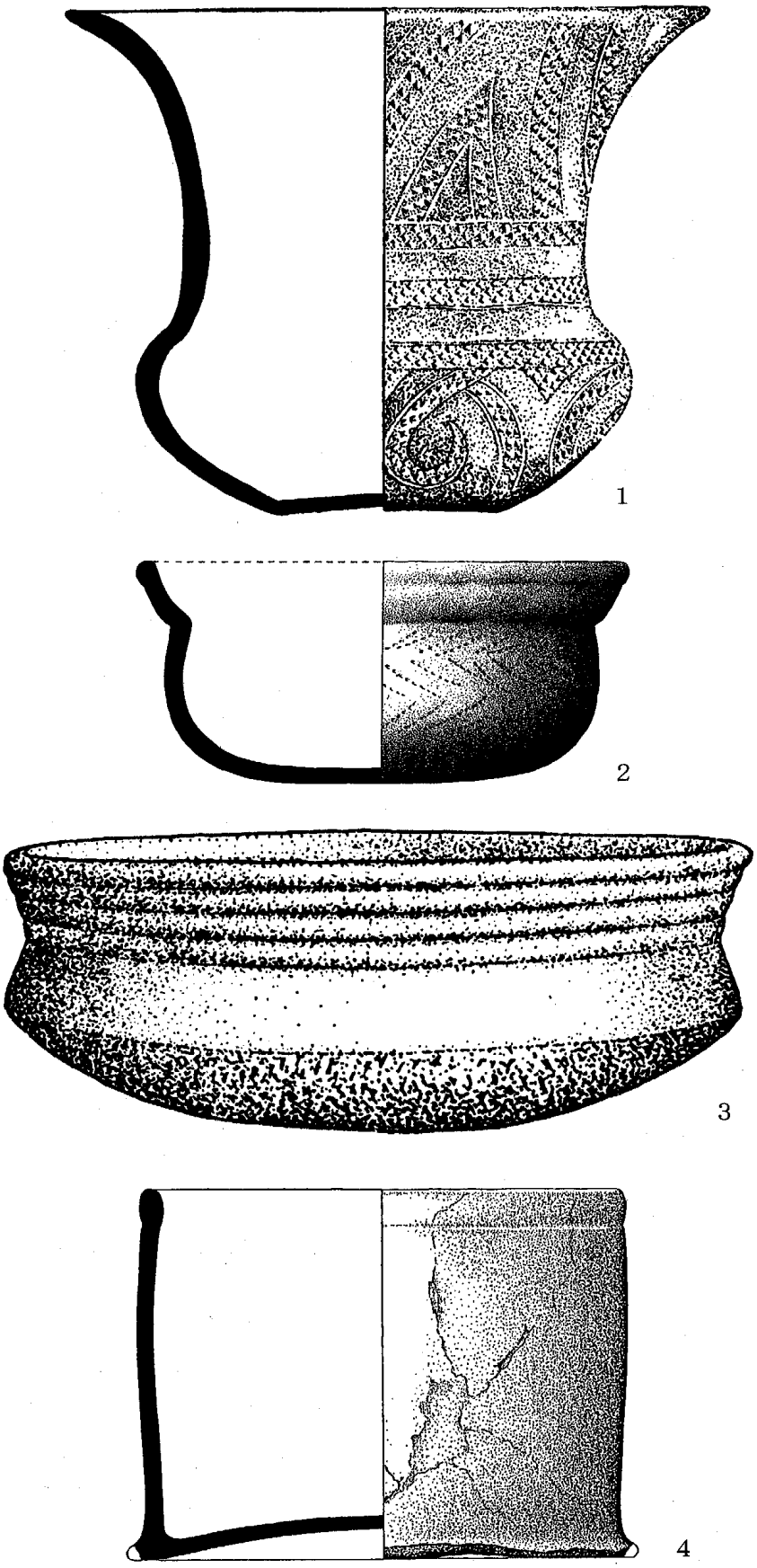


図８　グアチャ遺跡出土土器（1：3号墓、2：地点不詳、3：N-2トレンチ伸展葬C、4：25号墓　1/4）

得られている[Adi 1985:57-61]。79B出土の略完形土器２個体を除けば、土器片の95％以上が79Aトレンチから出土した。後者で土器片は深さ80cmの層位まで出土をみ、うち30～50cmの深さに主体があった。70～80cmの層位でホアビニアン（中石器文化）とのわずかな混在が認められるものの、これより下層では土器片の出土は皆無となり、一方ホアビニアンの石器がかなり夥しくなる。

小片総数580点（うち中国陶磁器２点）中、100点余が口縁部の破片である。しかも、出土土器片のほとんどは既出の類型に包括される。属性の観察は特に厚さと色調に注がれ、また多種におよぶ口縁部形態が抽出された（図11）。これらは単一様式に代表され、G.シーヴィキングの報告所見にある２つの異なる土器伝統を示す兆候はない。回転台使用の証跡も通して認められ、普く「盛期＝後期」に属する所産とみている。

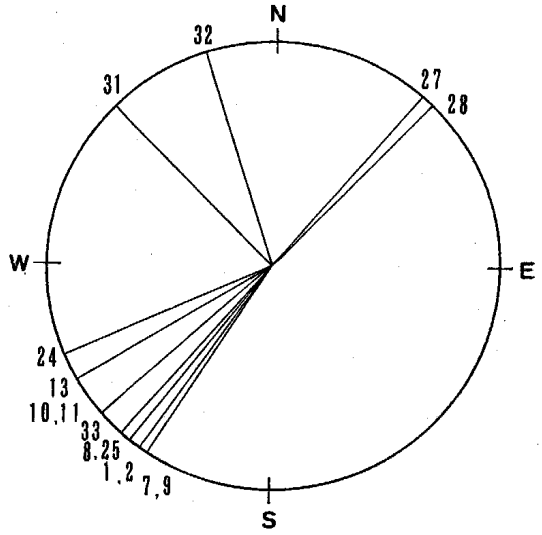
口縁は多くが外反するが、真っ直ぐたつ部類もある。口唇部は通常丸みを帯び、有孔磨研土器も１点みる。口径は20cm前後がほとんどで、最大で26cmを測る。一部に縄目を施す底径14cmの器台も出土（９種eか）。

胴部片464点中342点に器面調整のための叩きによる押捺が施され、約74％にあたる。また、113点が無文で９点に赤彩が施されている。さらに、赤色顔料（ヘマタイト）の製粉貯蔵に用いられたと思われる土器が６点認められており、新知見といえる。叩き縄目の撚り紐は細かいものから粗いものまで様々で、斜行や格子の押捺になっている。ちなみに、1954年本調査出土土器の90％に縄目押捺がみられる。片や、たいてい刻みのついた叩きでは菱形の格子目となっている。なお、器面に縄目押捺を施した後に磨り消しその深みを減じる技法も特筆される。

要所としては、下層に営まれたホアビニアン＝中石器文化との明確な層位・年代上の並存は認められず、前１千年頃あるいはその直後に新来の新石器文化に置き換わったとみる。だが、前後期の間に空白の証をやはり見出しえなかった。

以上のようにグアチャ遺跡の新石器時代については、前後期二段階説と単一時期説とに見解が分かれている。器種や類型ごとの型式学的変遷と共伴関係並びに層位的事実を整合させ、さらに周辺の相前後する時期

伸展葬の頭位方向



(数字は埋葬番号)

頭位方向	埋葬番号	副葬土器						
北西	31							
	32							
北東	27	9f	9f	縄目	縄目	縄目		
	28	7g	7h					
南西	1	11l	○					
	2	3j	3k	5g	5k	11k		
	7	5g	5g	5l	5m	7i	9f	
	8	1-2l	1-2l	5n	6c	7f	8b	10g
	9	1-2g	1-2h	2c	2c			
	10	1-3m	5b					
	11	5a	5e					
	13	2b	2c					
	24	1-2d	2e	7i	9d上	9d下	縄目	
	25	1-2l	1-2l	1-2i	2f	5c	7種	11k
	26	縄目	縄目	縄目	縄目			
	33	2i	2l	6種				
西(南西の可能性)	A	○	○					
	B	1-2e	2種	○				
	C	2種	5種	5種	12n			
二次葬	3	5f	8a	縄目				
	4	5g	6種					
	5	5f						
	6	4m						
	29							
	30	1-2i	2a					

図9　グアチャ遺跡の新石器時代埋葬と副葬土器の対応関係
(棒グラフ内は土器の分類記号／○は不詳)

の遺跡資料と比較検討することが肝要と思われる。

（5）系統・類縁

グアチャ出土土器と東南アジア他地域の類例との比較については、アディ・タハ［Adi 1985：57］も通観するように、Solheim 1959（サーフィン文化との対比：AP.3）、Solheim 1970(タイのノンノクタ遺跡との対比：AP.13)、Wall 1962(ボルネオ島ニア洞穴との対比：SMJ.10)、Sieveking 1962(FMJ.7)、Sørensen 1972（“タイおよび北部マレーシアの新石器文化と龍山文化との関係”）などに代表され、つとに海外で大胆に試みられてきた。グアチャ遺跡の土器群は、タイ中西部のバンカオ文化土器伝統との類縁性が例証されてきたが、それでもやはりある範囲独自性を保持しており、それは地域的な展開や年代差を通じて説明されるかもしれない、とするセーレセンの見解に氏も賛同している。

物資の交易や文化的交流が営まれておれば、遠方からの舶載や搬入により土器のダイレクトな移動はありうる。流通商品に至っていない新石器時代の在地製作による土器は、生業や環境に起因する地域集団のアイデンティティーから地域性や独自性を生じやすい傾向がある。したがって、土器伝統の系統・類縁関係については、まず地域（マレー半島）内での変遷や組成を総合的に検討したうえで、相互に整合させていくのが正道と考える。

4．おわりに

今後、グア・ムサン遺跡やブキット・テンクレンブ遺跡などマラヤ新石器時代の周辺遺跡の土器について比較検討を加えねばならない。

なお、1985年８月にクアラルンプール国立博物館において、アディ・タハ博士のご厚意によりグアチャ遺跡1979年再発掘で出土した土器片を手にとって観察させて頂く機会を得た。また後記の助成を受け、2005年３月にタイのバンカオ遺跡博物館を訪ね、標式遺跡の資料を実見することができた。ともに謝意を表したい。

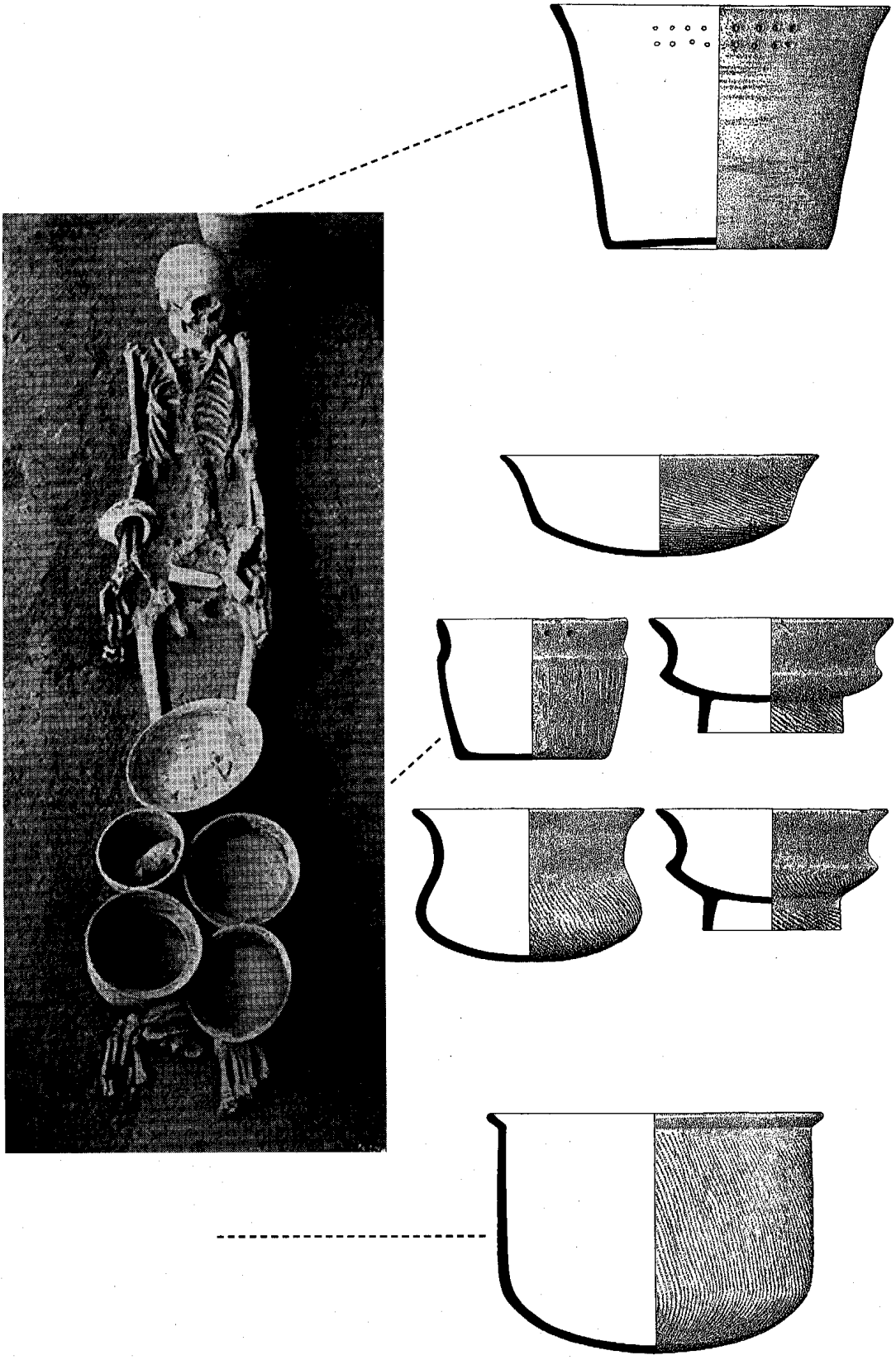


図10　グアチャ遺跡8号墓（若年女性）と副葬土器（1/6）

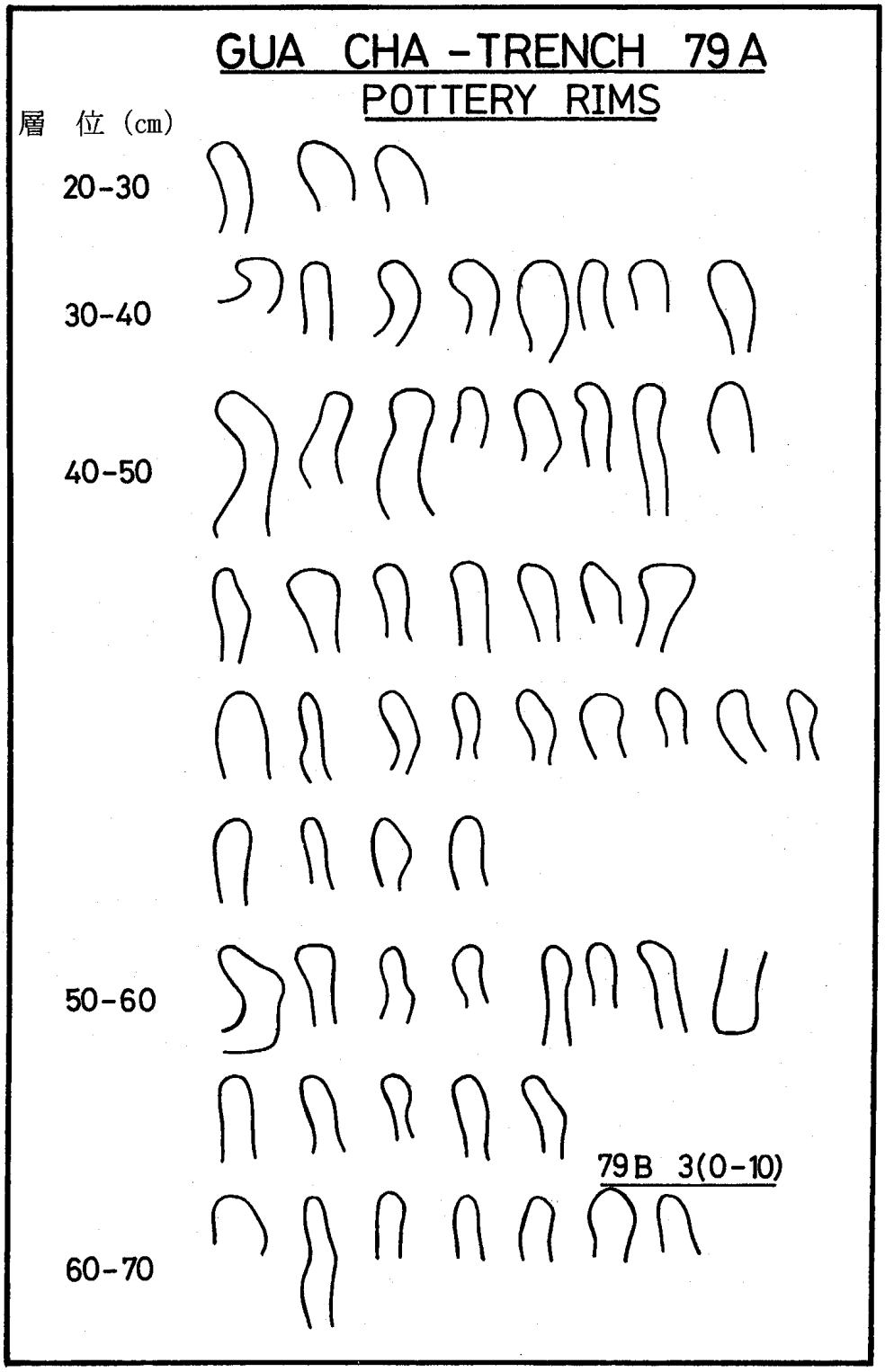


図11　1979年再調査出土の土器片の口縁部断面形態(右側が内面)

註

＊１）原著第７章の注40（pp.200、邦訳588頁）に、Solheim 1970：plate Icとあるが、plate Idの誤植と目される。ノンノクタ遺跡ベイヤード調査第９層の出土土器の文様を類例として指している。

＊２）[Peacock 1959：128]の分類一覧のなかで、p.134 Fig.7の櫛歯刺突文土器（図８-2）を８種（viii）-c類の参照例として記しているが、内実からみて12種（xii）-m類に該当する例と思われ、おそらく付記場所の誤りであろう。

＊３）図９において、１～６号墓が「前期」、７～33号墓が「後期」に比定されている。試掘調査でのA号墓は不詳、B～C号墓は「後期」と目される。

参考文献

今村啓爾　1979　「グア・チャ」『世界考古学事典』上　平凡社　304頁

今村啓爾　1984　「東南アジアの土器」『世界陶磁全集』16（南海）小学館　254～71頁

今村啓爾　1989　「東南アジアの土器」『アジアと土器の世界』雄山閣出版　145～72頁

江坂輝彌　1961　「インドシナの先史文化」『世界考古学大系』８（南アジア）平凡社　64～76頁、図88～94

川名広文　1986　「マラヤ新石器時代の岩陰墓」『史境』13　歴史人類学会（筑波大学）83～95頁

川名広文　1987　「東南アジアにおける中石器時代の埋葬」『比較考古学試論』　雄山閣出版　345～67頁

小林知生　1970　「石器文化の宝庫を探る（東南アジア）」『半島と大洋の遺跡』―沈黙の世界史10　新潮社　113～97頁

新田栄治　1998　『東南アジアの考古学』（共著）―世界の考古学⑧　同成社

Adi Haji Taha 1985 The re-excavation of the rockshelter of Gua Cha,Ulu Kelantan,West Malaysia.*FMJ* 30:1-134.

Al-Rashid,M.I 1969 A note on the Gua Cha small sherds. *FMJ* 14 :76-88.

Bellwood,P. 1978 *Man's Conquest of the Pacific – The Prehistory of Southeast Asia and Oceania* – .Collins, Sydney.（植木武・服部研二訳『太平洋―東南アジアとオセアニアの人類史』法政大学出版局　1989年）

Bellwood,P.　1985 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Academic Press, Sydney.(Revised ed. 1997, University of Hawaii Press, Honolulu)

Noone,H.D. 1939 Report on a new Neolithic site in Ulu Kelantan. *Journal of the Federated Malay States Museums* 15(4) :170-74 & plates, Singapore.

Peacock,B.A.V. 1959 A short description of Malayan prehistoric pottery. *Asian Perspectives* 3(2):121-56,Honolulu.（刊行1961）

Sieveking,G . de G. 1956 Excavation at Gua Cha, Kelantan,1954, Part Ⅰ. FMJ Ⅰ・Ⅱ:75-138.

Solheim,W.G 1970 Northern Thailand, Southeast Asia, and world prehistory. *Asian Perspectives* 13:145-62

Sørensen,P 1999 The Ban Kao culture of Thailand and Malaysia. *Paper presented at the International Colloquium on Archaeology in Southeast Asia in the 3rd Millennium*,Penang,Malaysia.（未見）

Tweedie,M.W.F 1955 *Prehistoric Malaya*. Background to Malaya Series №6(3rd ed.1965 / 1970),Eastern Universities Press, Singapore.

Williams-Hunt 1952 Recent archaeological discoveries in Malaya(1951). *Journal of the Federated Malay States Museums*25(1):181-90.

＜雑誌略記＞

FMJ: Federation Museums Journal (Kuala Lumpur).

挿図典拠

図１　Adi Taha 1985：p.7 Map 1を転載・改変

図２　Noone 1939：付図（岩陰平面図）、Sieveking 1956：p.82 Fig.2、および Adi Taha 1985：p.27Fig.1より転載・改変

図３～図７　Peacock 1959：Fig.1～Fig.5を転載・加筆

図８　１、２：Peacock 1959 Fig.6,7、３：Tweedie 1955 Fig.12、４：Sieveking 1956 Fig.20(2)をそれぞれ転載

図９　Noone 1939、Sieveking 1956の報告並びにPeacock 1959の分類をもとに筆者作成

図10　Sieveking 1956：PL.7、Fig.12,13より転載し構成

図11　Adi Taha 1985：p.60 Fig.8を転載・加筆

（本稿は2004年度札幌大学研究助成－共同研究－による成果の一部である）